

## 平成30年度 全国学力・学習状況調査における

### 北九州市立 江川 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成30年4月17日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数, 理科)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

#### 1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

#### 2. 調査内容

##### (1) 教科に関する調査(国語, 算数, 理科)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力
・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能	・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

※理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う。

##### (2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

### 3. 教科に関する調査結果の概要

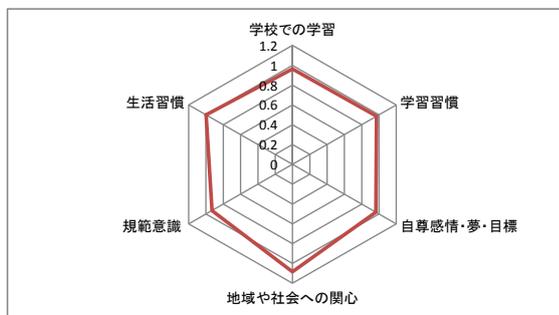
#### (1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 算数A・B, 理科)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B		理科	
	平均正答数	平均正答率								
本市	8.5	71	4.3	54	8.6	61	5.0	50	9.6	60
全国	8.5	71	4.4	55	8.9	64	5.1	52	9.6	60

#### (2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	全体的に見れば、全国・本市と本校との平均正答率の差はあまりない。傾向としては、「言語についての知識・理解・技能」の面に課題がある。また、特徴としては「選択式の問題」より、「短答式の問題」に苦手意識が見られる。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	登場人物の心情について、情景描写を基に捉える問題は、正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う問題は、今後より一層の努力を要する。	
国語B	全体的な傾向や特徴など	全国・本市と本校との平均正答率の差は、国語Aに比べるとやや広がっている。傾向としては、「書く能力」「読む能力」に課題がある。また、特徴としては「選択式の問題」より、「記述式の問題」に苦手意識が見られる。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	話合いの参加者として、質問の意図を捉える問題は、正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	目的に応じて、複数の本や文章などから的確に内容を読み取る問題は、読書活動の習慣化を含め、継続的な努力が必要である。	
算数A	全体的な傾向や特徴など	全体的に見れば、全国・本市と本校との平均正答率の差はあまりない。傾向としては、「図形」「数量関係」の領域に課題がある。その結果が、「数量や図形についての技能」の正答率の低さに表れている。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	除法で表すことができる二つの数量の関係は、ほぼ理解しており正答率も高かった。	
	努力が必要な問題	「1」に当たる大きさを求める問題の、除数が小数である場合の計算において、繰り返し練習し慣れていく必要がある。	
算数B	全体的な傾向や特徴など	全国・本市と本校との平均正答率の差は、算数Aに比べるとやや広がっている。傾向としては、「数と計算」「量と測定」「図形」の領域に課題がある。また、特徴としては記述式の問題に苦手意識が見られる。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	棒グラフと帯グラフから読み取ることができることを、適切に判断する問題では正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	条件に合う図形を見いだす問題では、「合同」の理解も含め、基礎的な問題に繰り返し慣れていく必要がある。	
理科	全体的な傾向や特徴など	全体的に見れば、全国・本市と本校との平均正答率の差はあまりない。傾向として、「自然現象への関心・意欲・態度」、「観察・実験の技能」の観点では、全国や本市の平均正答率を上回っていた。また、特徴としては短答式の問題は正答率が高く、記述式の問題に苦手意識が見られる。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	骨と骨のつなぎ目について、科学的な言葉や概念を理解している問題では、正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	調べた結果について考察する際に、問題に対応した視点で分析する活動は、問題に繰り返し取り組み慣れていく必要がある。	

### 4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の宿題については、取り組む割合が少しずつ増えてきている。</li> <li>・朝食をとってくる児童が確実に増えてきている。</li> <li>・比較的新しい地域もあるが、地域行事への関心は高い。</li> <li>・友達や周りの人の為に役に立ちたいという意識の高まりは見受けられる。</li> <li>・決まった就寝時間を守るなど、生活習慣の大切さを促す必要がある。</li> <li>・「話し合う活動」を漫然と取り入れるのではなく、その効果や広がりにも重きを置いた取り組みが必要である。</li> <li>・自尊感情を高め、将来に「夢」や「希望」を持てるような取り組みを計画的に進めなければならない。</li> </ul>

### 5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

#### ① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

<ul style="list-style-type: none"> <li>・全校で「学習の流れ」(わかる授業づくり5つのポイント)を徹底する。全教職員で一時間一時間の学習の大切さについての共通理解を深め、「めあて」～「ふりかえり」の流れを大切に授業を目指す。</li> <li>・学習後子どもたちがどれくらい理解できたか、診断テストなどでチェックし、できていない内容は補充学習をするなどして、学習内容の定着を図る。</li> </ul>
--

#### ② 家庭生活習慣等に関する取組

<ul style="list-style-type: none"> <li>・「家庭学習のすすめ」を配布し、家庭学習の必要性を継続して啓発していくなどして、子どもたちが自主的に家庭学習に取り組むように家庭の支援をお願いする。</li> <li>・全学年で、家庭学習の項目を統一し、「国語・算数・自主学習」の三つを必ず毎日出すようにする。ただし、自主学習に於いては、学年の発達段階に応じて、内容を精選する。</li> <li>・小中が連携した取組を進めるために、学力向上についての小中合同研修会の機会を増やし、共通理解を図る。</li> </ul>
--